

特集
京都
古都の美とまちづくり

Special Features
Kyoto
Beauty and Renovation of the Traditional City

古都のまちづくり史
History of the Traditional City Renovation

古都の生い立ち

民衆のまちづくり

高橋康夫

TAKAHASHI Yasuo

京都大学大学院工学研究科建築学専攻/教授



古都・京都に基盤目に走る通りがあり、それぞれ固有の、情緒豊かな名をもっていることはよく知られている。しかし、京都に住んでいる人にとってさえ、数多くの通り名をすらすらということはかんたんなことではない。だから子供たちが「まるたけえべすに、おしおいけ」(丸太町、竹屋町、夷川、二条、押小路、御池)と歌う、通り名の童歌は、京の都市空間のなかで暮らすための生活の知恵といつてよい。

「通り」という言い方は戦国時代の末に始まり、そして近世初頭にかけての都市発展期に、平安時代以来の道の名称とは異なる新しい通り名が数多く生まれた。この数十年は、「まちづくり史」の上で大きな時代の画期をなしている。通りとその名は、長い歳月をかけて行われてきた都市民衆のまちづくりと深いところがかかわっているのである。

京都の千年をこえる歴史のなかで、京に住まう人々は、どのように「まちづくり」にかかわり、どのような「まち」をつくってきたか。平安京から現代京都にいたる「まちづくり」の道のりは、「まちづくり」と都市住民のありかたから、大きく次のような発展段階に分けて理解することができる。

京都の平安京居住——前史、平安初期
京童の「住みこなし型まちづくり」

——平安中期(十世紀～)から室町時代まで

町衆の「計画型まちづくり」——戦国時代

町人の「計画型まちづくり」——安土桃山時代・江戸時代

市民の「計画型まちづくり」——近代～

市民の「参加・協働(コラボレーション)型まちづくり」

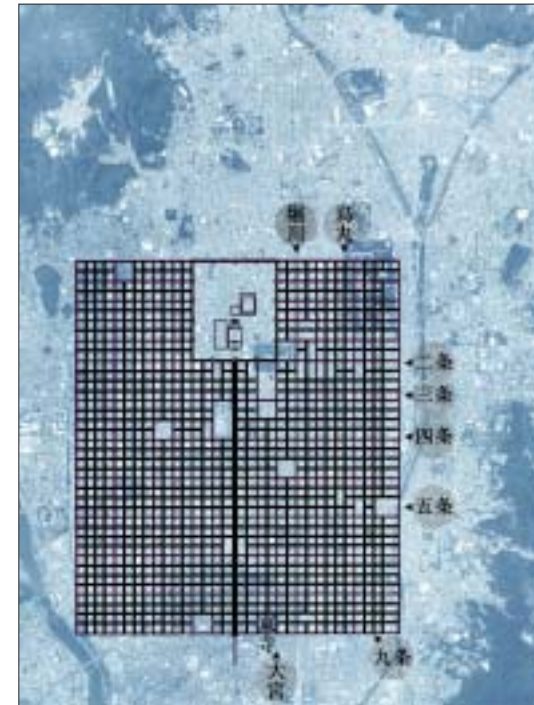
——現代～

1——平安時代～室町時代——京都人の誕生と「住みこなし型まちづくり」

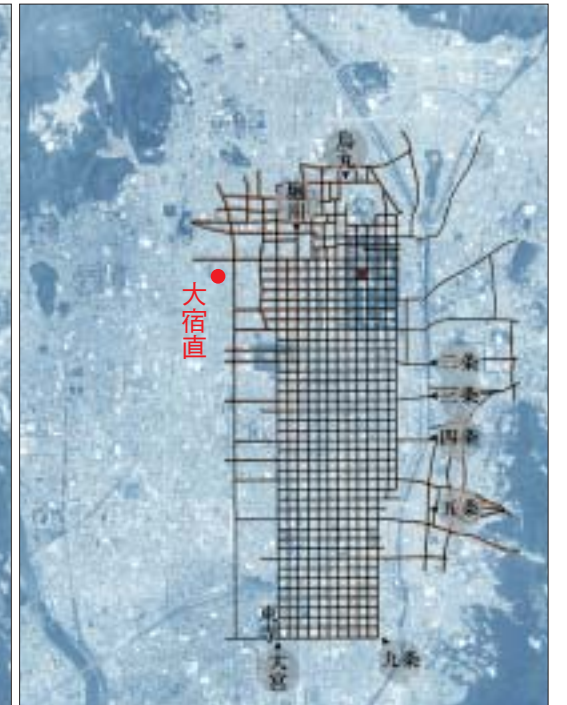
現代都市京都の原点は、街区を中心とする都市計画理念(条坊制)にもとづいてつくられた古代都城、平安京である。平安京に住むことになった人々は、都市に住まうという新たな生活スタイルにもとづいて、計画都市に住みこなし、また数百年をかけて新たな都市空間を創りあげていった。京都人によるまちづくりは、平安京の空間理念や都市計画の無視、否定あるいは逸脱として進んだ。そうして平安京はついには道が中心となる都市空間、京都に姿を変えてしまう。平安京を破壊しつつ、新たに中世的な都市、京都を創り出すという大きな潮流は、まちづくりの視点に立つと、京都の住民による住みこなしの積み重なりが引きおこしたとみることができる。

官設の市場である東市・西市にかわって、「町(まち)」、すなわち「私」の市場の発達したことに注目したい。十二世紀後半、都市住民が生活用品などを売買する場は、「町」と呼ばれる南北に走る小路、すなわち「町の小路」(現在の新町通り)となっていた。「町」そして「町の小路」の成立は、道において物・人・情報の交流が行われる、つまり道が生活空間の中核となった新たな都市状況をはっきりと示している。鎌倉時代のはじめには、「町の小路」と東西の大路が交差する地域、上の三条町・四条町、下の七条町とが商業地区として並びたち、繁栄を競っていた。歌人として知られる藤原定家は、七条町について「土倉員数を知らず、商賈充滿し、海内の財貨ただその中にありと云々」(『明月記』)と記している。

もう一つ、同業者集住による「まちづくり」が行われたことを指摘しておきたい。もともと律令国家の官衙工房に所属した綾織りの織手が、鎌倉時代前半にはかつての大内裏の中の「大宿直」の地に集住し、活動していた



■図1—平安京の都市計画



■図2—室町時代の京都

ことが知られる。室町時代になると、大宿直は織物業の一大中心地であり、諸国名産のなかに「大宿直の綾」とあげられるほど有名になっていた。そして、かつての一町四方の規模から地域的にも大きく発展し、しかも、少なくとも八軒の酒屋と二軒の土倉がある繁華な地域を形成していたのである。ときに洛中と並び称され、また祇園会に「笠簪」を出したことは、大宿直の繁栄ぶりを示しているといえよう。大宿直は、同業者が集まり住んで「町」(地域生活空間)をつくった早い事例であるとともに、京都の伝統産業地域である西陣のルーツであったことを記憶にとどめておきたい。

2——戦国時代——まちづくりの担い手・町衆の誕生と「計画型まちづくり」

京都の自治の歴史において有名な「町の囲い」構築事件が起きたのは、大永七年(一五二七)の年末のことであった。当時、新たな支配者として京に登場した堺公方府の横暴に対し、同じ町内に住む町衆や公家が一致協働して積極的に「町の囲い」、つまり敵から町を防ぐ土堀などの要害を構築し、町の安全を守ったのである。このころ成長を遂げた「町」(都市住民の地縁的共同体)を基盤とした「集団的自衛のまちづくり」ということもできよう。「町」が発展し、いくつかの「町」が連帯、協働して集団的な活動を行うのもこのころである。

天文二年(一五三三)には下京六十六町の月行事が祇園社に群参して「神事これなくとも、山鉾渡したし」と主

張したことは、祇園祭が下京に住む民衆、そして下京の町々の祭礼となっていたことをはっきりと物語っている。

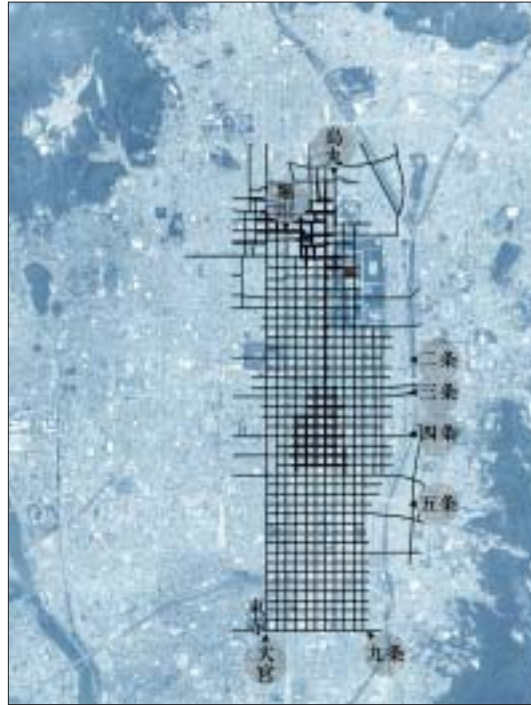
都市民衆の結束と自治的活動はいつそう発展し、十六世紀なかごろには上京・下京それぞれの地域ごとにくつがの町が連合して町組を結成するようになる。そうした町組の上に上京と下京の惣町組織が成立する。戦乱の世のなかで、上京・下京の都市民衆は、こうした地縁的な生活共同体である町を基盤として、人夫役などの諸役免除や寄宿免除(軍兵の宿泊免除)、非分課役停止(臨時の課税や夫役の禁止)などを求め、また生活の安全や都市祭礼の維持のために、自治的な活動を行った。生活空間を防御する堀や土居、土堀、木戸門などの要害の施設、すなわち、「構」も、やがては町や町組が積極的、計画的に構築・維持するようになった。

3——安土桃山時代・江戸時代——町人と「町」の「計画型まちづくり」

応仁の大乱に始まる戦国の乱世は、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の強大な武力によって収束にむかう。京都の都市支配についてはそれぞれに独自の政策があり、一方、「町」共同体が確立し、さらにそれらが統一権力の都市支配機構のなかに組み込まれることによって、まちづくりにも大きな進展と変容があった。

●1 織田信長の二条城と「新町」の形成

一五七〇年代、京都は都市再生の道を歩み始める。京都に入った織田信長は、将軍足利義昭の居城である



■図3—戦国時代の京都(太線の地域が上京・下京の中心地)



■図4—江戸時代初期の京都

発し、移転した新在家絹屋町、それぞれの道である。上京の白雲の地にあった絹屋町は、もちろん上京焼討のときに焼失したが、信長は、室町幕府と特別の関係にあったこの絹屋町に移転を命じ、内裏の南の新地を与えて復興させた。新在家絹屋町の建設は、商工業者による商工業者のための地域開発であり、「計画型まちづ

くり」を建設し、そして権力拠点である二条城を核として、そのまわりに武家屋敷地を配置した。当時の上京は、公武寺社権門に従属する商工業者が数多く居住する地域であった。これに対して下京は、市町的といえるような町場であった。それぞれに特徴をもっているが、いずれも「構」を備え、市町や寺院などを有する複合的な大規模集落であった。

信長は、分散的・二極的な地域集落であったこの上京と下京を、「二条城」とその城下の建設によって統合、一元化し、近世的な都市空間へ再編しようとしたのである。こうして上京と下京の「構」のあいだ、すなわち二条城の周囲にあった空閑地には、しだいに家屋が建て続き、町並みが形成されていった。京都の住人は、天下統一を目前にしてより積極的に「まちづくり」を行うようになっていたのであろう。こうして形成された町々を、当時の人々は「新町」とよんだ。この自然形成的なまちづくりはその後、大きな動きとなって、江戸時代初期まで続くことになる。

●2 「町」の「計画型まちづくり」——新在家絹屋町の計画的開発

元龜四年(一五七三)、京都の住民にとって恐怖の事件が勃発した。信長による上京の焼討であり、これによって町衆によるまちづくりの成果は灰燼に帰した。

上京焼討後の京都は、三つの異なった市街発展の道を歩むことになった。焦土からの復興をめざす上京、中世的な市街が残存する下京、新たな土地に新市街を開

くり」として特筆に値するものである。

●3 辻子・突抜・路地

ところで、「構」に市街地の大きさを制約され、きわめて高密度な居住をするほかなかった戦国時代の洛中では、奥地・裏地を活用するために宅地の中に通路がつけられた。これが当時「路地」、「突抜」、「辻子」などと、さまざまに呼ばれた宅地内の道路であった。

宅地内の道路を用いて敷地を高密度に利用する方法は、戦国期になって初めて現れたものではなく、かなり早くから行われてきた。しかしながら、こうした機能をもつ道が町衆の手によって数多く開発されたことが戦国時代らしいといえる。道は「公界」であるというのが社会通念であった洛中に、今でいうところの「私道」が発生し、定着した都市状況こそ、町衆による町づくりの発展を雄弁に語るものとして注目すべきである。

●4 豊臣秀吉の京都改造——「住みこなし型まちづくり」の集大成

天正十年(一五八二)、信長の跡を継いだ秀吉は、強大な統一権力を背景に天正十四年(一五八六)に聚楽第を建設し、天正十五・十七年に洛中検地、天正十八年に市中町割と寺町形成、天正十九年に御土居築造と地子免除と、あいついで画期的な都市政策や大規模な都市基盤の整備を実行して、京都の城下町化をはかっている。

「まちづくり史」の視点から、洛中検地と市中町割がもつ意味をのべておこう。洛中検地は町人の宅地の規模

を一筆ごとに測量、確定し、町ごとに列挙したものであるが、おのずから町々の規模が決定されることになった。さらにその結果として洛中を走る東西南北の通りの道幅をも定めることになった。応仁・文明の大乱後、弱体化した室町幕府でさえ、市街復興の過程で狭くなっていた道路幅員を平安京の姿に戻そうとしたのに、豊臣秀吉政権はそのような政策は採用しなかったのである。これは平安京条坊制の都市理念が明確に否定されたことを示している。平安時代以来八百年の歳月をかけた住民のまちづくりの成果、具体的にいうと、人間的スケールの道幅と街区形態、宅地割がおおやけに認められたということである。これが近世、そして近・現代京都の都市空間の原型となった。

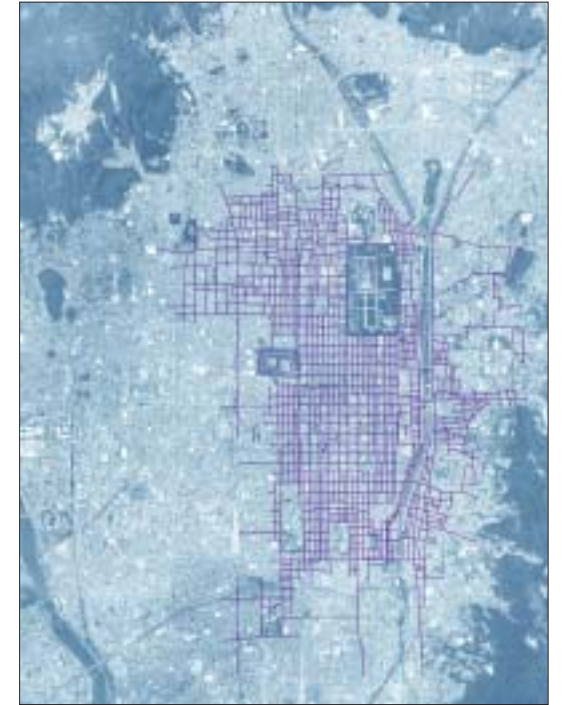
市中町割の改造は、寺町一室町間、および堀川以西の地域に半町ごとに南北の小路を通したものである。新たな地割の実施された部分は、人口・町家の少ない地域であり、京都の将来像を考慮して、整然とした町区画となるように改造を行なったと考えられる。この新たに開通された南北の通り、およびそこに成立した町を、「突抜」、「突抜町」と呼んでいた。だから秀吉による市中町割の改造は、「突抜」を開通し、そこに整然と「突抜町」を開発することを構想したものといえよう。

「突抜」という言葉は、町割改造以前からすでに使われており、辻子と類似した語義、形態をもっているといっている。辻子による土地の高度利用は、平安時代に始まり、室町時代後期から広汎に成立しつつあった。秀吉の市中町割改造事業はこれに着目し、開発を先行的、計画的、誘導的に実施することによって無秩序な都市発達を防止しようとしたと理解することができる。

「新町」の発展が続くこの時期にふさわしい事業といえようが、これもまた住民のまちづくりの手法を都市支配者が利用し、都市計画手法としたものであった。豊臣政権は、平安京・京都の住民によるまちづくりを継承して近世都市の礎をおいたといえることができるのではないかと。近世初頭の京都は、ある意味で住民によるまちづくりの集大成なのである。

●5 幕藩体制と「町並み」——町と暮らしと町並み

元和五年(一六一九)、徳川幕府は政権の拠点を江戸に置くことにしたため、京都は首都としての地位をふたたび失い、都市の活力に翳りが見えた。しかし、十八世紀になると、人口増加が始まり、市街地内部の空閑地の再開発や、鴨川以東の市街地開発が進行した。これらの多くは、寺社などの領主による大規模な開発にしろ、商人資本によるミニ宅地開発にしろ、利益をあげることを



■図5—明治時代の京都

を目的に行われたまちづくりであることが特徴である。

強固な幕藩体制のもとで「平和」が根づくにしたがい、日常生活を円満に行うために町共同体による決まり、「町掟」が、土地の売買・譲渡・賃貸から住人の職業、町家のファサード(正面外観)、町並みの構成にいたるまで、およそ生活全般におよんだ。たとえば、家屋敷の売買の時に買い主が「町並み」に、すなわち隣近所の家と同様に見世棚をつけることを誓約しなければならなかったところもある。町家のファサードについて約束事を定めていたことは、現代の建築協定と関連して興味深いだが、統一感のある整然とした京の町並みは、こうした町の約束事を背景におのずから形づくられた。町家のファサードや屋根に防火的な材料を用い、また敷地の奥に土蔵を並べて延焼防止の工夫をするなど、いわば「防災まちづくり」もしだいに行われるようになった。度重なる火災がそうした努力を加速したのである。

現代社会が期待する都市の将来像はきわめて多岐にわたっており、それを反映して、さまざまなねらいをもった「まちづくり」活動が、さまざまな人々によって、さまざまなかたちをとって活発に行われている。このような「まちづくり」の現代的状況は、筆者には、戦国時代の町衆の活動と重なって見える。破壊の時代のあとを生きなければならなかった戦国時代と二十一世紀が、ともに、都市空間を再生し、新たな市民文化を産みだした創造の時代である、ということができるようになればよいと思う。